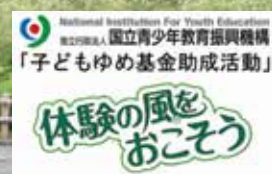


第20回 国際ボランティアワークキャンプ in ASO

make the first step!! ～ 未来へのきっかけの輪 ～



ありがとう! おかげさまでボラキャンは20周年の軌跡を刻むことができました!



2025年8月15日(金)～17日(日)

於: 国立阿蘇青少年交流の家
国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

Contents

ページ	内容
02	目的・概要
03	未来職道協力者／スケジュール
04	開会式／基調講演
05	第1分科会「多文化共生」
05	第2分科会「医療」
05	第3分科会「貧困」
06	第4分科会「環境」
06	第5分科会「災害」
07	第6分科会「幸福」
08	全体交流会
08	未来職道／全体報告会
09	クロージング講演、委員長からのメッセージ 特別企画「ただいま つながん」映画上映
10-11	アンケート報告

目的

「高校生や大学生たちの若い人材の「生きる力」を育む！」

21世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生が日々の地域でのボランティア活動などを点検しながら自ら企画、運営を行う国際ボランティアワークキャンプ（以下、「ボラキャン」と記述）を2泊3日で実施しました。このボラキャンは、世界が直面している「紛争」や「飢餓」、「環境」、「人権」など様々な課題について関心を持つ高校生たちが毎年春ごろから学校の垣根を越えて集まり実行委員会（executive committee：以下、「EC」と記述）を組織し、夏休みに行う本大会に向けて企画・運営を行い、一般で参加する同世代の高校生たちと自分たちで出来る課題解決の取り組みを作り上げるもので平成18年から開催しています。

20回目となった本年度のボラキャンは、その節目を記念し、特別企画として、東日本大震災で被災した宮城県気仙沼^{しげたろ}地区の復興に携わった大学生ボランティアたちが、その活動を通じて復興の手助けをしながら現地の人たちと繋がり、移住していく様子を描いたドキュメンタリー映画「ただいま つながん」を上映しました。

同世代の高校生や大学生、留学生たちにとってボランティア活動の意義を学ぶとともに、諸問題に取り組む大人たちとの交流を深める場として、とても有意義な時間になり、次の活動につながってくれたら幸いです。

概要

- 開催日程
2025年8月15日（金）、16日（土）、17日（日） 2泊3日
- 開催場所
国立阿蘇青少年交流の家
（阿蘇市一の宮町宮地6029-1）
- 参加者
131人（高校生101人、留学生10人、大学生サポーター5人、講師2人、アドバイザー8人、事務局5人）
- 主催
国際ボランティアワークキャンプ実行委員会
- 構成団体
熊本ユネスコ協会、税理士法人近代経営研究所、株式会社日本リモナイト、一般社団法人ドリーム・ラボ、一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
- 共催・協力団体
独立行政法人国際協力機構（JICA）九州センター、日本ボランティア学習協会
- 後援
熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本日日新聞社
- 事務局
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
この事業は令和7年度「子どもゆめ基金」の助成を得て活動しました



未来職道協力者

（順不同 敬称略）

- 12団体
・日本ボランティア学習協会（興梠 寛）
・新和町地域活性化プロジェクト（辻 誠）
・日本語教師（大住 葉子）
・NPO法人外国から来た子ども支援ネットくまもと（竹村 朋子）
・TEDxKumamoto（安田 亮治、入江 悠真、Erica Yakabi Bedrihana）
・一般社団法人日本ワーキングホリデー協会（藤田 逸郎）
・一般社団法人九州環境地域づくり（澤 克彦）
・阿蘇ジオパーク推進協議会（永田 紘樹）
・独立行政法人国際協力機構（遠藤 浩昭）
・特定非営利活動法人NGO福岡ネットワーク（多原 真美）
・NPO法人 Free the children Japan 熊本グループ（岩坂 省吾）
・次期ボラキャンEC募集ブース（20期ECたち）
- 分科会アドバイザー
第1分科会「多文化共生」 竹村 朋子、大住 葉子
第2分科会「医療」 大和 賢佑
第3分科会「貧困」 岩坂 省吾
第4分科会「環境」 勝家 伸男、木下 俊和
第5分科会「災害」 八木 浩光
第6分科会「幸福」 尾上 香織、高野 慎也
- 講師
興梠 寛（日本ボランティア学習協会代表理事）
西尾 雄志（近畿大学総合社会学部教授）
- 通訳
前川 福美（中国語 ※ボラキャンOG）
李 佳澄（英語、中国語）
- 大学生サポーター（ボラキャンOG）
石川 明嘩、市川 青空、小島 優里、高本 いろは、田村 陽菜
- 事務局
八木 浩光、勝谷 知美、徳淵 健一、マグダレナ ムジゴト

Schedule

8月15日（金）1日目

- 9:30 集合
- 10:00 出発（熊本市国際交流会館）
- 11:30 到着（国立阿蘇青少年交流の家）
- 12:00 入所オリエンテーション、昼食 @講堂
- 13:15 開会式
基調講演
（興梠 寛氏 日本ボランティア学習協会代表理事）
- 14:30 分科会活動①
第1分科会「多文化共生」 @中研修室
第2分科会「医療」 @小研修室6
第3分科会「貧困」 @小研修室2
第4分科会「環境」 @小研修室7
第5分科会「災害」 @小研修室2
第6分科会「幸福」 @小研修室4
- 17:00 タベの集い
- 17:30 夕食
- 19:00 交流会「キャンプファイヤー」 @草原
- 21:00 入浴
- 22:30 就寝

8月16日（土）2日目

- 6:30 起床
- 6:50 クリーンタイム（清掃）
- 7:15 朝の集い
- 7:30 朝食
- 9:00 分科会ワークショップ② @各研修室
- 12:00 昼食
- 13:00 分科会ワークショップ③ @各研修室
- 17:00 タベの集い
- 17:30 夕食
- 19:00 未来職道 @大研修室
- 21:00 入浴
- 22:30 就寝

8月17日（日）3日目

- 6:30 起床
- 6:50 クリーンタイム（清掃）
- 7:00 朝の集い
- 7:30 朝食
- 9:00 分科会 発表会 @大研修室
- 11:00 クロージング講演
（西尾 雄志氏 近畿大学総合社会学部教授）
- 11:50 閉会
- 12:00 昼食
- 13:00 ボラキャン20周年特別企画「ただいま つながん」上映会
- 15:30 退所
- 17:00 熊本市国際交流会館到着、解散

開会式・基調講演

報告：鋤野 百香(九州学院)、谷口 心春(熊本西)

第20回国際ボランティアワークキャンプ in ASOは国立阿蘇青少年交流の家に於いて2泊3日で開催されました。参加者は総勢131人(高校生101人、留学生10人、ボラキャンOG5人、講師、アドバイザー、事務局15人)に参加して頂いたことに心から感謝します。参加者の中には中国、台湾、韓国、モンゴル、バングラデシュ、インドネシア、ミャンマー、タイ、北マケドニアの留学生、中国やフィリピン、韓国にルーツを持つ高校生にも参加して頂き、言語の壁を超えて、沢山の国や地域の人と交流する有意義な時間を過ごすことができ、学びを深めました。

今年のテーマは、make the first step!!～未来へのきっかけの輪～です。Make the first stepには「自分から行動しよう」という意味を含めました。またサブタイトルの～未来へのきっかけの輪～には、今回のボラキャンを通して、参加者全員の新しいきっかけを作り、未来へと繋げていく輪にしたいという願いが込められています。開会式では、ECによる自己紹介を始め、分科会を指導して下さるアドバイザー、

ボラキャンOG、講師、事務局スタッフの紹介を行ったことで場の雰囲気も和み、その後、興梠寛先生の基調講演が始まりました。

先生の講演ではボランティアについてお話をいただきました。はじめに参加者同士で自己紹介する時間をとっていただいたことで楽しく交流できました。ボランティアはする側もされる側も両方がボランティアをしていて相手に必要とされる事で生きることの意味と喜びを探求することができるという考えがずっと印象に残っています！他にも大事なと思ったことは、ボランティアを通して地域社会やグローバル社会の課題を自分事として捉え、問題解決のために参画する責任意識を持つという言葉です。ボランティアに参加する際にはただ、ボランティアをするだけではなくボランティアを通して何を考えるか、自分がどう成長したかを実感しながらボランティアができると良いと思います。EC、参加者どちらにとってもボラキャンに参加している身として、学びある深い話でそれぞれ考えを深めることができたと思います。幸先の良いスタートになりました。



第1分科会

「多文化共生」

参加者
20名

報告者：高瀬 由乃(九州学院)、鋤野 百香(九州学院)、毛利 本仏(鹿本農業)
EC：農崎 湊斗(八代清流)、高 君儀(熊本北)、李 遠暢(尚綱)
アドバイザー：竹村 朋子氏、大住 葉子氏

私たちの分科会は、外国人雇用も増えてきている中で、文化の違いによって外国人の人権が侵害されている現代の社会に対し、『わたしたち同じ地球人、共に平等な世界を作ろう』をテーマに掲げて活動しました。生まれた国や地域の違う人々が互いの文化的な価値観や習慣、考え方を理解し、尊重する姿勢を持つことで偏見をなくし、地域社会の構成員として共に生きていけるように、様々な文化について学びました。

1日目、まずは自己紹介をして、アイスブレイクでフルーツバスケットを行い、途中から英語だけでお題を出すようにして、英語が得意でない人も得意な人もみんなで楽しむことができました。次に、ECによる発表で、外国にルーツを持つECが住んでいた地域の紹介、また留学経験のあるECは留学先での経験談や文化、食べ物について半年かけて準備したことを紹介しました。ECにとってみんなの役に立てて成長できる機会となりました。その後、中国のお菓子を食べ、参加者同士で会話を楽しみました！

2日目の午前中は、多文化クイズとして、日本と中国で異なる漢字の意味クイズや海外の食事時のルール、多文化共生を実現するための課題クイズを出し、クイズを通しての異文化理解を目標としました。次にカルランゲーム※1を行いました。勝者には外国産お菓子をおまけするのでみんなお菓子を狙って楽しんで取り組んでいました。次はワードウルフ※2というゲームをしました。このゲームを通して日本で暮らしている外国人が不安や孤独を感じていることを知り、違いを理解し、共通点を見

つけ、つながることの大切さに気付きました。また、外国にルーツを持つECや参加者の方に日本に来てからの体験談について話を聞きました。考えていた以上大変な経験をしている子達がいることを学びました。最後に、私たちのゴールである差別や偏見について考えました。外国に対するイメージから始め、活動を終えてどのようにそのイメージが変化したのかを振り返りました。自分の身の回りにおける差別や偏見って何なのか、それらをなくしていくために、私たちには何ができるのかを班で話し合ってもらい、「相手の文化を知ること」、「ステレオタイプにとらわれない」、「外国人との交流を大切にすること」といった意見がでました。

一人一人が自分と向き合い、多文化共生社会をどう実現していくかが課題となっている今、自分自身に何ができるのか、真剣に考えている様子がECとしてとても心に残りました。全てうまくいったわけではなかったけど、アドバイザーやボラキャンOGにアドバイスを沢山もらいながら協力しあって、臨機応変に対応しながら無事、分科会活動を終えることができました！かけがえのない思い出になりました。参加者の皆様、そしてアドバイザー、OGの皆様、本当にありがとうございました。

※1カルランゲームとは、例えば英語が分からない人に対し、身振り手振りでその行為を伝えようとするゲームで、例えばUsing chopsticksの動作をジェスチャーや英語を使って相手に伝えようとするゲームのことです。

※2ワードウルフとは、みんなであるお題について制限時間内に雑談をして、その雑談の中で「みんなとは違うお題」を与えられた少数派の人を見つけ出すというゲームです。



第2分科会

「医療」

参加者
15名

報告者兼、EC：市原 輝子(ルーテル学院)、田口 想太(熊本中央)、増田 愛子(真和)、溝田 起子(真和)
アドバイザー：大和 賢佑氏

私たち医療分科会は、「医療格差」を軸に、問題を自分事として捉え、「高校生」に何ができるのかを、4つのテーマに分けて考えていきました。

まず1日目は、アイスブレイクとして他己紹介をし、お互いについて知りました。次に、「どういときに格差を感じるか」という質問をして、参加者たちにたくさん意見を出してもらいました。出てきた意見はそれから2日間で学ぶことに関することも多く、その後の話し合いをスムーズに行うことができたと思っています。1日目の最後は、テーマ①「発展途上国」をしました。始めに、発展途上国とされている世界の国々をみんなで考え、世界地図を用いながら確認していきました。ワーク①「日本と発展途上国の違い」、②「格差を埋めるためには」では、付箋を用いながらグループワークを行い、たくさんの意見や考えを出してもらいました。

2日目の最初は、アイスブレイクとして、ワードウルフを行い、更に仲を深めました。次に、テーマ②「先進国と日本」をしました。先進国の中でも、「医療アクセスと質」という点で高く評価されている北欧に注目しました。医療費の資金源や医療アクセスなどの項目で北欧諸国と日本を比べて、最後のワーク「どうしたらより質の良い医療を提供できるのか」を、班になって話し合ってもらいました。テーマ③では、「日本の救急時と災害時の医療」をしました。救急時の医療では、少子高齢化による需要の変化があること、災害時の医療では、救える命

も救えない可能性があることを学びました。そして、クイズやワークを通して救急車の利用判断や避難所での対応について話し合い、考えを深めました。テーマ④では、「過疎地域と都市部の医療格差」をしました。始めに、ロールプレイングゲームを行い、医療環境の違いを体感しました。ワーク①では、医療に関することをウェビングで出してもらい、医療従事者だけでなく、それを支える人も大切であることを知ってもらいました。最後のワーク③で、自分にできることを付箋に書きました。

最後に2日間学んだことを通して、これからどういうふう生きていきたいかを紙に書いてもらいました。活動していく中で、参加者の皆さんが、たくさんの考えを出してくださったため、新たな気づきが生まれ、考えを深めていくことができました。反省点としてECが声を揃えて言ったのは準備不足です。そのせいで、たくさんの方々に迷惑をおかけすることになってしまいました。私たちECは、反省点をこれからの生活に活かしていくことをここに誓います。反省点はたくさんありますが、医療分科会は雰囲気良く、たくさん学び、考え、発表し、実りある3日間になりました。最後になりましたが、医療分科会に参加してくださった皆さん、本当にありがとうございました。そして、医療分科会を支えてくださったアドバイザー、OG・OB、すべての関係者の皆さまに心より感謝いたします。



第3分科会

「貧困」

参加者
13名

報告者：呉 安捺(熊本商業)、下西 瑛里子(湧心館)
EC：岩下 聖奈(文徳)、島津 陽奈(九州学院)
アドバイザー：岩坂 省吾氏

私たちの分科会は「貧困について知り、貧困を取り巻く児童労働問題(ファストファッション、教育格差)を学ぶことで、自分たちに何ができるかを考える」ことを目標に活動しました。2日間を通して体験型の活動や意見交換を行い、貧困を自分事として考える機会を持ちました。

1日目は、他己紹介を行い打ち解けた後、児童労働を身近に感じてもらうためのシミュレーションゲームを行いました。参加者たちは最初こそ楽しんでいましたが、これが実際に起きている現実だと知り驚き、児童労働の深刻さを実感していました。その後、リフレッシュタイムとして隣の人同士で小指をつなぎながらお菓子を食べる「助け合いゲーム」を行いました。それまで緊張していた空気が和み、意見が活発に出るようになり、その後の活動が進めやすかったです。次にファストファッションの裏側にある問題として、児童労働や環境負担について学びました。意見交換では「服のタグを見る習慣をつける」「商品の背景を考えて選ぶ」など具体的な行動が挙げられ、一人ひとりの選択が社会を変える力になることを共有しました。

2日目は、名前を覚えるアイスブレイクの後、教育格差について学びました。最初に「言語ゲーム」を行いました。様々な言語で、1つは「薬」、残り4つは「毒」と書かれたペットボトルを用意し、1つを選択

するというゲームです。参加者16人中3人だけが正解の「薬」を選択しました。このゲームで文字が読めないことで命に関わる危険があることを体験しました。続いて、識字率やユニセフの取り組みなど世界の現状を知り、「自分が学校をつくるならどうしたいか」をテーマに意見を出し合いました。「家庭科で調理実習を取り入れジェンダーにとらわれない教育をする」「勉強の仕方を学ぶ授業をつくる」など様々な意見が出て、活発な議論になりました。

その後、貧困をキーワードにウェビングを行い、意見を分類しながら貧困の多様な側面について考えました。ファストファッションや教育格差といった問題はすべて貧困につながっていることに参加者自身が気づきました。さらに「貧困の定義、なぜ貧困は生まれるのか、なぜならないのか」をクイズ形式で学び理解を深めました。最後に、ワールドカフェ方式で「貧困がなくなった世界」をテーマに意見交換し、それぞれが「自分にできること」を宣言しました。今回の分科会を通じて、参加者は自分たちが当たり前と思っている環境や生活を見直し、その価値を再認識することができました。すぐに大きな変化を起こすのは難しいかもしれませんが、日常生活の中で少しでも意識を持ち、行動につなげることが、貧困解決の第一歩になると考えます。



第4 分科会

「環境」

参加者
11名

報告者：山田 ありす(八代白百合学園)
EC：大宮 愛美(真和)、西村 莉胡(八代白百合学園)
アドバイザー：勝家 伸男氏、木下 俊和氏

環境分科会では、「絶滅危惧種や阿蘇の生き物をテーマに、クイズやワークを通して楽しみながら環境問題について考える」ことを目的に活動を行いました。知識を頭に入れるだけでなく、参加者自身が生き物に興味を持ち、自分や身の回りとのつながりを感じることで、初めて「守りたい」という気持ちが芽生えるのではないかと考え、このテーマを設定しました。

1日目は、分科会活動における簡単な説明の後、参加者同士の仲を深めてもらうため、アイスブレイクを行いました。初めて顔を合わせる参加者同士が安心して意見を出し合える雰囲気を作ることが、これからの学びを深める土台になると考えたからです。最初は不安そうな顔をしていたり、緊張していたりするようにも見えましたが、1日目の活動が終わった頃には笑顔が溢れていて、アイスブレイクの重要性を実感しました。

2日目は、絶滅危惧種に関するクイズと、阿蘇に関するクイズを行いました。「絶滅危惧種という言葉は知っていても、具体的にどの生き物が絶滅の危機に瀕しているのかを知らない人が多いのではないか」という課題意識から、このクイズを用意しました。また、阿蘇に関するクイズを行った理由としては、熊本という地域性に根差した生き物や、環境について取り上げることで、「身近な自然に目を向けること」につなげたいと考えたからです。クイズが終わった後、環境保護の観点にお

いて、広い視野を大切にしながら価値観の対立を理解することを目的とした「エコかエゴかゲーム」を行いました。問題を提示し、「この行動はエコ？それともエゴ？」ということについて、班ごとに話し合ってもらいました。途中、「私はエゴだと思う」「私はエコだと思う」といった異なる考え方もあり、互いに意見を伝え合うとても充実した時間になりました。その後、自分の好きな熊本の生き物を選び、紙に特徴や魅力をまとめてもらう「イチオシ生き物紹介」を行いました。イチオシ生き物紹介を通して伝えたかったことは、「好きという気持ちは守る第一歩になる」ということと、「身近な存在への関心が、環境全体への関心につながる」ということです。好きな生き物がもし絶滅の危機に陥ってしまったら「守りたい」と思うはず。守りたいという気持ちが強ければ強いほど、「何が原因で絶滅の危機に陥っているのか」や、「その生き物を守るためには自分がどういった行動をすればいいのか」といったことについて真剣に向き合おうという意識が湧いてきます。「“守りたい”という意識を強く持って、これからの環境問題に向き合っていく！」という、環境分科会から、参加者の皆さんに向けたメッセージです。

環境分科会として活動し、生き物や環境について真剣に向き合った数ヶ月間は、とても貴重で大切な経験となりました。今回の学びを忘れず、今後の生活や活動の中でも環境を意識して行動していきたいと思っています。



第5 分科会

「災害」

参加者
12名

報告者兼 EC：池田 理来(文徳)、谷口 心春(熊本西)
アドバイザー：八木 浩光氏

私たちは「安心したサポートで外国人被災者を助けよう!」を目標に、3日間の話し合いをしました。

1日目は自己紹介を兼ねたアイスブレイクとして、英語だけを使って誕生日順に並ぶバースデーラインをしました。言葉が通じない不便さを実感できた活動となり、その後はグループごとに外国人や災害に関するクイズを実施しました。さらに、外国で薬を買う場面や災害時の行動を想定したシミュレーションゲームを通じて、外国人が日本で抱く不安を体感してもらいました。緊張から思うように話し合いを進められなかったことは反省点です。

2日目の午前中は、アドバイザーの八木先生から外国人被災者の体験談を伺い、課題を付箋に書き出し、その後、指差しボードづくりをしました。情報伝達リレーで言葉が通じない難しさを体感したうえで、既存の指差しボードを実際に使い、必要だと思う項目をイラスト化してオリジナルのボードを完成させ、思いやりや個性が反映された作品となりました。続いて、熊本県の外国人向け防災パンフレットについて検討しました。内容は充実しているものの周知が不足している課題があり、空港や役所などで配布する方法が効果的ではないかという意見が出ました。

午後は「災害時に安心できる地域」をテーマに、参加者一人一人が市長になったつもりで外国人と地域をつなぐ交流イベントを考え、楽しく参加できる入り口と学びにつながる出口を意識し、味噌玉づくりや公共交通機関を活用したツアーなど多彩な案が生まれました。考えが煮詰まったときにはECや八木先生に助言いただき、新しい視点を得られたのも大きな学びでした。最後に、3日目の発表会に向けて模造紙に意見をまとめ、1日目よりも話し合いが円滑に進み、参加者の笑顔が増えていたのが印象的でした。

3日目の全体発表会では、この2日間で学んだことを一人ずつ自分の言葉で熱意のこもった発表となりましたが、発表内容が豊かすぎて予定時間を過ぎてしまい、時間配分に課題を感じましたが、夜遅くまで準備に取り組んだ努力や、留学生が場を盛り上げてくれたことに胸が熱くなりました。

この3日間を通じて「災害時にも安心できる地域づくり」を考え、高校生としてできることを模索しました。小さな一歩でも、行動する人が増えれば社会は少しずつ変わっていくと信じています。最後に、意見を出し合ってくれた参加者の皆さん、支えてくださった八木先生、事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



第6 分科会

「幸福」

参加者
18名

報告者：高木 朝日(熊本中央)、渡邊 美央(真和)
EC：蔵原 一恩(千原台)
アドバイザー：尾上 香織氏、高野 慎也氏

幸福分科会では「発展途上国の国民が不幸せだと思うか」という言葉をテーマに、幸福とは“客観的に考えられるもの”なのか、幸福とは“誰が決めるのか”を考え2日間を通して、自分の幸福を定義し、幸福になるための手段を考えました。流れとして、一日目には、アイスブレイクで壁をなくし、導入としてどういうときに幸福を感じるかを共有しました。そのあとに、幸福について考えやすくするために、幸福についての知識を〇×ゲームの形式で共有を行いました。最後に一日目時点での自分なりの幸福の定義を書いてもらい、参加者やECと考えを共有しました。

2日目は、前日の復習から入り、一日目では主に客観的な幸福について話しあったことを確認し、2日目の内容は主観的な幸福の話であることを念頭に進めたいという話をしました。そこから研修室を移動し、広く使える武道館で人生ゲームを行いました。このゲームの狙いは自分が人生ゲームを通してどういったところに幸福や不幸を感じるのかを紙に書いてもらい、自分の感情を見える化することを狙いとしていました。そして武道館から戻り、幸福は自分以外に決めることのできない主観的なものであることを伝えるための人物判断ゲームを行いました。最後のゲームでは、偉人達がどのよう

に幸福を定義づけていたのかを共有し、幸福を主観的に判断する材料を提供しました。これら2日目のゲームを通して、幸福は主観的に考えるものであり、他者に決めることはできないということ伝えました。そして“自分が幸福になるためにはどうしたらいいのか”をこれからの人生で導きやすくするために、マングラチャートやECで作成したシャボン玉シートを使い、幸福になるための手段を考えました。

最後に2日間を通しての幸福の再定義を行い、ECが伝えたかったことを参加者と共有してからそれぞれの感想を述べて終わりました。予定から大幅に変更した部分がありましたが、参加者の反応を見ながら進められたので良かったと思います。そして、分科会を進行するうえで目的を伝えてから始めることで参加者が次に何をやるのかをイメージしやすかったことが良かったです。反省点として、計画するときに目的、目標を早く決めて内容を考えることができれば、より質の高い分科会になったと思います。参加者の方々が積極的に参加してくださったこと、アドバイザーの方々の助け、そしてECのメンバーに感謝します。ありがとうございました。この分科会をきっかけに一緒に楽しい人生を送りましょう。



全体交流会

1日目の夕方に全体交流会を行いました。雨が降った影響でキャンプファイヤーの木が濡れていたため、火がつくか確認する間に、ホールでジャンケン列車のゲームをしました。このゲームが終わる頃には火がついたので、草原に移動してキャンプファイヤーを囲みながらビンゴゲームをしました。

今年は英語を学びたい、使いたいという参加者が多かったので、ゲームは全部英語で進行しました。ジャンケン列車では、英語で自己紹介をした後、ロック、シーザー、ペーパーのジャンケンを英語でやったので、少し難しく感じた人もいたかもしれませんが、みんなで協力して楽しんでいました。また、みんなで「貨物列車」の歌を歌いながら盛り上がりしました。

ビンゴゲームでは、英語で書かれたカードを使い、参加者同士で英語を使いながらやり取りをしました。少し苦戦する場面もありましたが、

報告者：岩下 聖奈(文徳)、高瀬 由乃(九州学院)

景色がかかっているのでみんな本気で楽しんでいました。笑顔がたくさん見られて、私たちEC運営側としてもすごく嬉しかったです。全体交流会を通して、同じ分科会のメンバーだけでなく、参加者同士やECとの仲を深めることができました。



未来職道

報告者：大宮 愛美(真和)、渡邊 美央(真和)

2日目の夜に行われた未来職道では、さまざまな分野で活躍する企業や団体の方々から活動について直接お話を聞くことができました。全部で12の団体ブースがあり、参加者がそれぞれ自分の興味がある分野のブースを周り、説明を聞き、質問などができました。

私も今回の未来職道を通して、今まで知らなかった仕事や働き方を知り、社会のさまざまな分野で自分にあったいろいろな形で活躍することができることを学びました。国内から海外まで普段なかなか接することのない現場の生の声を聞くことで『働くこと』の意味や自分の将来について考えるいい機会になりました。この経験を通して私も自分にできることで誰かの役に立ちたいという気持ちが強くなり、今回得た学びを大切に、今後の進路選択や将来の職業について深く考えたいです。(大宮)

昨年、参加したときは理由もなく近くにあるブースを回りましたが、今回は行きたいブースを友達と共有して未来職道に参加しました。事前に行きたいブースを決めていたこともあって、興味のある

分野のスタッフに話をお聞きできて見聞を広めることができました。また、私は次期ECのためのECブースを担当していたときに自分の分科会の参加者が来てくれたのでとても嬉しかったです。また、それまで他分科会の人と話せていなかったのですが、このときに話ができとても盛り上がりました。来年はECとして参加してくれたら嬉しいです。(渡邊)



全体報告会

報告者：高木 朝日(熊本中央)、田口 想太(熊本中央)

全体報告会は全員が発表できるように、あらかじめ各分科会の参加者たちをAからFまで6つの班に分け、それぞれAからFで分けられた同じ班同士が集まることで分科会毎に構成されたグループが出来ます。そして、そのグループが張り出された6つの発表用模造紙の前を周り、自分が担当した分科会の前に来れば発表するという仕組みのものです。

準備する段階で、工夫を凝らしたレイアウトや、分かりやすい説明ができるように練習してもらうように心がけましたが、発表の練習ができなかった分科会や、本番になって不安そうな表情を浮かべる参加者もいましたが、それでも参加者たちは、真剣に取り組み、聞いている側にもその熱意が伝わったように思います。

全体の反省点として、発表時間が足りないブースや質問がなくなり静まり返っているブースもありました。改善策として各分科会で練習

をする時間や、どんな質問を出せばよいか司会が促すと、より活発な話し合いになると思います。参加者たちからは自分なりにいい発表ができたという声が多く嬉しく思いましたが、練習時間が足りないという声や効率が悪いなどの意見も出ましたので今後の改善に繋がってほしいと思います。この報告会の成功へ向けて準備を手伝っていただいたボラキャンOG・OBを始め、アドバイザー、事務局の方々、本当にありがとうございました。



クロージング講演、講評

クロージング講演を近畿大学教授の西尾雄志先生にいただきました。ボランティアに関する問いを投げかけていただいたことで、私たちがこのワークキャンプで何を学び、なぜこの2泊3日の活動に参加したのかを改めて考えるきっかけとなりました。特に「ボランティアに愛はある?」という問いかけには、その場にいた全員が真剣に向き合っていました。その姿を見て、このキャンプに参加して本当に良かったと感じました。講演を通して、仲間と共に考えを深め合えた3日間は、とても大切な思い出

報告者：山田 ありす(八代白百合学園)

出だと改めて実感することができました。今回得た学びを忘れず、今後の活動に活かしていきたいです。



閉会

閉会では、まずキャンプのアンケートに答えてもらったあと、ECたちから「参加者の方々が自主的に行動していただいたことで、とても良い雰囲気でボラキャンを終えることができ、ECをやってきて良かったと思えた」などの感想を発表しました。その後、ボラキャンの歴史を辿る動画が放映され、この企画が開催されたきっかけなどを、オリジナルソングと共に視聴しました。みんな真面目にアンケートに向き合っている姿

報告者：西村 莉胡(八代白百合学園)

や、近くの人と仲良く話している様子が見え、嬉しくなりました。また、発表が始まった際もみなさん真剣に聞いていて、とても雰囲気が良かったです。大きな拍手も起こり、とてもよい閉会となりました。私も、参加者やECたちの想いを感じたことによって、自分自身の3日間を振り返り、学びを得ることができました。

20周年特別企画「ただいまつなかん」上映会

報告者：池田 理来(文徳)、谷口 心春(熊本西)

3日目の午後はボラキャン20周年記念事業、映画「ただいま つなかん」を上映しました。この映画は、2011年3月、2万人以上の死者・行方不明者を出した東日本大震災からの復興の模様を10年以上追いかけたドキュメンタリーです。現場は宮城県気仙沼市唐桑町鮎立、旅館を営む菅野一代さんと学生ボランティア、地域の方々が紡いできた物語です。被災した菅野さん一家は被災地支援に来た学生ボランティアたちと交流しながら復興に取り組んでいた時、家族を海難事故で亡くし、一代さんは再び「息をするのも辛い」と言うほど落ち込んでしまいます。しかし、学生ボランティアたちの力を借りながら少しずつ立ちあがっていきます。「つなかん」をみて、ボランティアは一時の活動で終わるのではなく、その後の生活にも多くの影響を与えてくれると感じました。長期的な活動を通して人を助けることだと知り、これからボランティア活動に携わる時は人との関わりを大切にしようと思いました。また、ボランティアには人を紡ぐ力があります。参加者の感想にも、「ボランティアを

通して困っている人を助けることで、自分が困った時に助けてくれる」、「多くの人と関わりを持つことで信頼関係が生れる」とありました。今年でボラキャンは20周年を迎えました。これも人との繋がりが生んだ人生の輪です。これからの皆さんの健勝を願い、ボラキャンが長年培ってきた普遍的な価値観を今後のボラキャンに関わる高校生たちが受け継いでほしいと願います。



実行委員長からのメッセージ

皆さん、こんにちは。第20回国際ボランティアワークキャンプ実行委員長の増田愛子です。振り返ってみると、心に残る思い出に満ちた、短くも充実した3日間でしたね。たくさん的高校生・留学生に恵まれて、記念すべき第20回ボラキャンを開催できたことをとても嬉しく思います。高校生が主体となる本大会では、一から企画していくので、新たな学びと共に難しさに直面することもありました。大会中、不安を感じる時が何度かありましたが、参加者の皆さんの「楽しい!最高!」といった言葉と素敵な笑顔に救われ、自信を持って最後まで活動できました。本当にありがとうございました。私たちECは、昨年の12月下旬から徐々に集結し、だいたい週に1回集まって話し合いを進めていきました。勉強や部活、個人の予定を両立することは難しい部分もありましたが、お互いに助け合いながら活動していき、自身を大きく成長させることができました。

報告者：増田 愛子(真和)

新たな仲間が増えたこと、たくさんの人たちと関わったこと、こんな素敵な歴史あるボラキャンに携わらせて頂けたことに感謝します。そして、今までボラキャンを繋いできたみんなに「ありがとう」を伝え、次年度へとバトンを渡したいです。最後になりますが、参加者の皆さん、ECのみんな、本大会を開催するにあたり裏で私たちを支えて下さったボラキャンOG・OB、アドバイザー、事務局の皆様にご心より感謝を申し上げます。

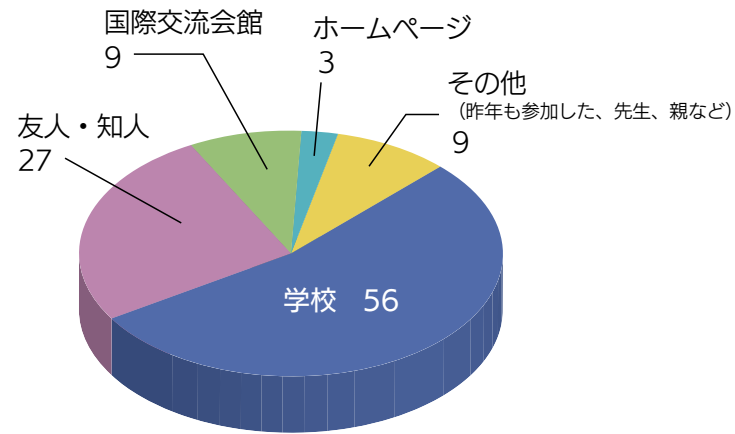


第20回
国際ボランティアワークキャンプ
in ASO

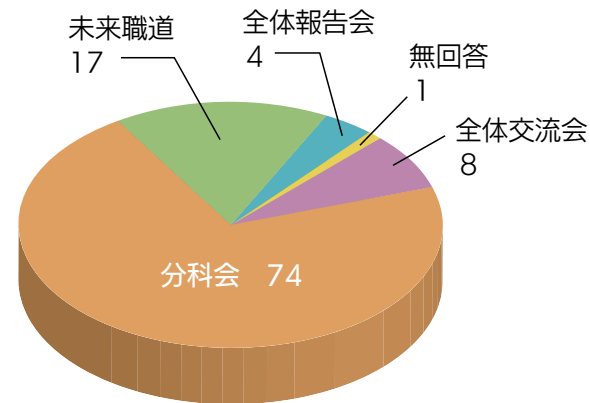
アンケート集計

回答数104
(参加総数111人)

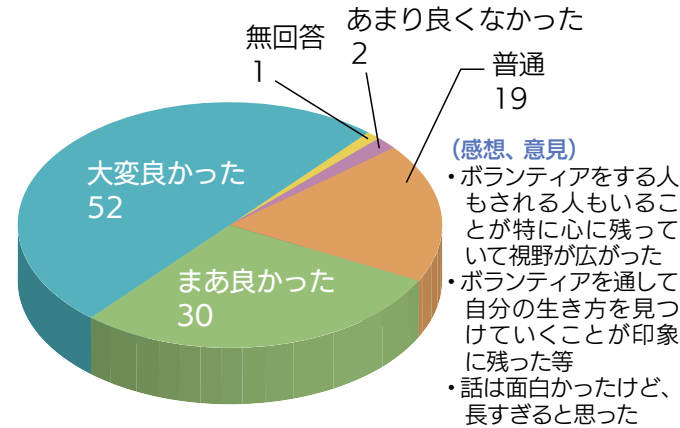
①ボラキャンをどこで知りましたか



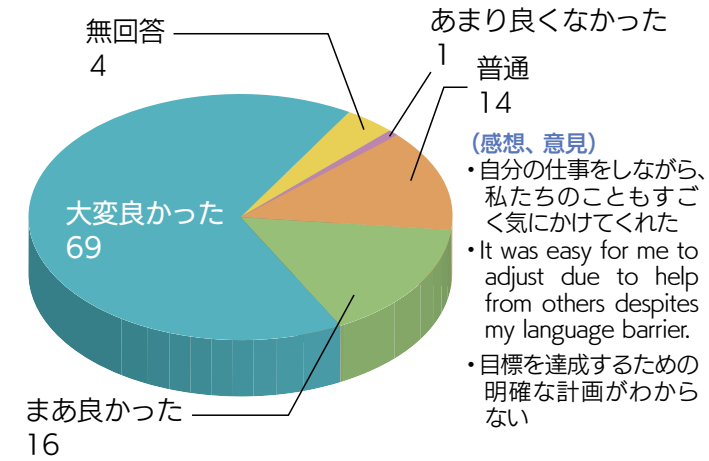
②一番印象に残った活動は何ですか



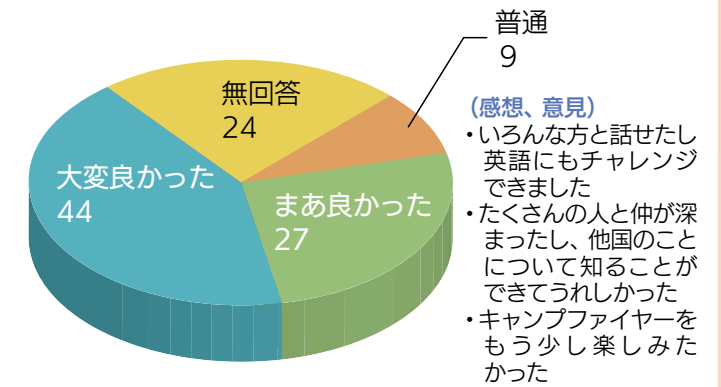
③基調講演はどうでしたか



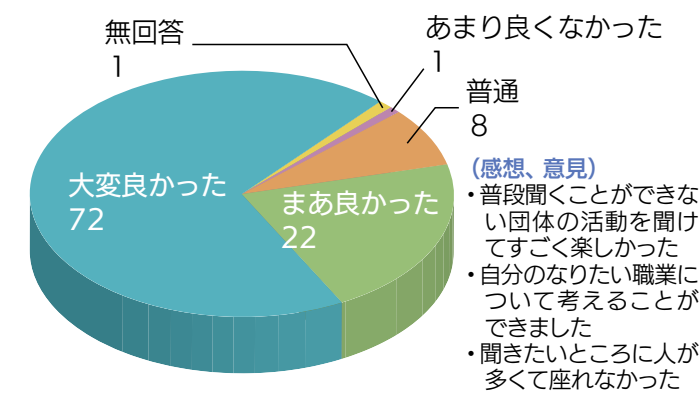
④実行委員の運営や対応はどうでしたか



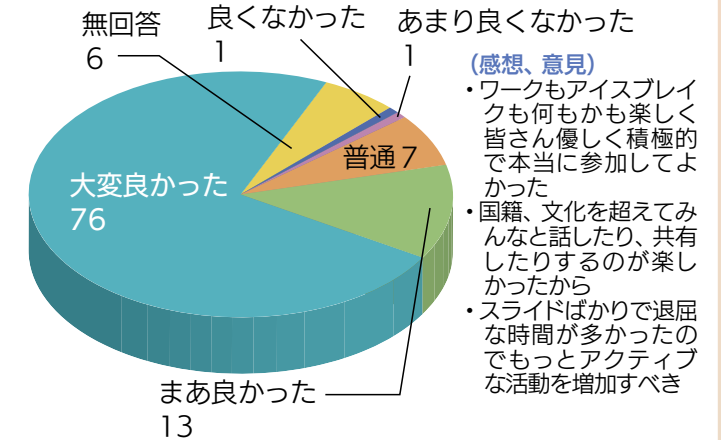
⑤全体交流会はどうでしたか



⑥未来職道はどうでしたか



⑦参加した分科会は如何でしたか？



・来年のボラキャンでECとして参加したいですか

希望者 17人

良い感想

※一部抜粋 アンケート全文は裏面の二次元コードをスキャンし該当ホームページからご覧ください

- ・最初は不安も大きく大変だなと思っていましたが、分科会が始まってからは友達がどんどんきて話し合いも弾んでずっと楽しく興味深い時間を過ごせました。特にポスター作りでは久しぶりのアナログのポスターにワクワクしてずっと心を躍らせていました。ECの方々は私たち参加者が楽しめるようにほとんど寝ずに考えたり話し合ったりしてくださったおかげで、とても達成感のある分科会になりましたありがとうございました。ごはん、お風呂もとても楽しくておいしくて気持ちがよかったです。初日が2日前とは思えないくらい充実した3日間になりました。来年が3年生でなければ参加したいほどでしたお世話になりましたありがとうございました。
- ・はじめは緊張や不安でいっぱいだったけど、自分の学びたい分野を新たにできた友達と一緒に追及することができた。大学で貧困やボランティアについて深く学びたいと思っているので、とてもいい時間を過ごすことができた参加して本当に良かった。
- ・学校でこのボラキャンのチラシを見て興味湧き参加しましたが、私は英語がとても苦手で今回少し苦労してしまったので次回も参加したいので、今度は英語を勉強し学力をつけたい。
- ・知らない人と友達もたくさん増え、外国人との交流がいい経験になった。
- ・昨年は不安の大きさと他の用事があって参加することができなかったのですが、今回、参加して本当に昨年も行けば

よかったと後悔するくらい大満足の3日間でした。分科会活動では私にはない意見をたくさん聞けて驚き、ワクワクしました。この分科会に入ったきっかけであった疑問も解消し、新たなステージに進むことができました。今回の3日間を通して、私が日常で感じていた社会の冷たさ、ボランティアの温かさなどのことについて多くの人が感じていることを知って、とてもうれしかったし自分に自信が少し持てたし、何かの行動に移す勇気ももらえた。本当に私の世界が広がる最高の3日間でした

ご意見等

- ・もっとボランティアにフォーカスして機会や関わり方も扱うべきだと思う
- ・昨年より楽しく感じたし、外国人とたくさん交流できてよかったが、未来職道の出展団体のバリエーションをもっと増やしてほしい
- ・とても楽しく友達と学ぶことができた気がする。多文化共生にも色々な問題があるけど、話し合いたいテーマを一つに絞って具体的に深められたらもっと良くなるかなと思った。
- ・キャンプファイヤーでのレクリエーションが暗くてやりにくかったので、他のものができたらいいと思う。
- ・活動は非常に意義があるが、日本語ができない留学生にとって体験はよくない

20周年特別企画「ただいま つなかん」の感想

- ・ボランティアをする側とボランティアを受け入れる側のつながりが生んだ人々の輪を素晴らしいと思いました。ボランティアはその活動だけで終わるのではなく、その後の生活に多くのものをもたらすのだなと思いました。
- ・つなかんがずっと続いているのは、講師の興梠さんが、ボラキャンが学生達の意味で続いてると言っていたように、学生達と(この映画の主人公)一代さんの意思が強いからなのかなと思いました。
- ・感動した。1回のボランティアから、こんなに繋がって、していただいたことを自分から恩返ししたいと思えるような映画でした。
- ・最初は、ツナ缶のアニメの映画なのかなと思っていたら全然違い驚きました。映画の途中までは、地震で津波の被害に遭いがらも学生ボランティアとの交流を通して少しずつ復興していく、楽しいホームビデオのような映画なのかなと思っていましたが、旦那さん、娘さん、娘さんの旦那さんが亡くなり、私もこのキャンプで小学生のときに友達だった子が去年亡くなったと知って、人の命は儚く、亡くなった人と一生会えないと考えると、とても悲しくなりました。
- ・とても感動しました。人はされる、さらされるの関係で深く関わっているのだなと思いました。ボランティアをしなきゃいけないというよりしたら信頼関係ができる橋になるなと感じました。ただいま つなかんの津波の影響を受けた地域を無理に盛り上げようとせず被災された方と同じ視点で考えて助けると言う言葉に驚きました。いままで地域を盛り上げようとしてたくさんの方が集まり、イベント並みのことをしてるのをみて地域の方も喜んでくれてると思っていたのに毎回毎回だどとちの体力もき

ついんだなと思ったからです。私がもしボランティアをすることになったら同じ視点で考えていまだ地域には何が必要なのかが判断し現地の助けになれるように頑張りたいと思いました。人との関わりがあるからこそ自分が大変なときに助けてくれる人がたくさんいるということを知りました。私はこれからたくさんの人と関わっていく上でされるのではなく自分がする側でいたいと思います。

今後のボラキャンへ期待されることは？

- ・今後のボラキャンには、さらに多くの学生たちが今後の生活を変えるような、人生の転機となるような活動となる事を願います。
- ・国際交流を沢山すること。
- ・もっと活動を増やしてほしいです!!!!
- ・この20回目という記念すべき回にECとして携われたことを嬉しく思います。正直ECをしていて大変なこととかいろいろあったけど、先輩方が作ってくださったボラキャンのバトンを繋ぐことができて本当に良かったです!こんなに楽しくて学びがある活動は他にないんじゃないかなって思っています!ボラキャンを作ってくださった当時の高校生や、初回から携わっていただいている講師の興梠さん、国際交流会館の八木さん、先生方、このボラキャンを繋いでくれた先輩方に心から感謝しています!
- ・私が期待するのはボラキャンのバトンを繋いで欲しいこと、また来年の参加者さんやECが楽しめるようにしてほしいと思います!



第20回ボランティアワークキャンプ実行委員（敬称略）

- 委員長 増田 愛子（真和）
 - 副委員長 鋤野 百香（九州学院）、高木 朝日（熊本中央）
 - 書記 谷口 心春（熊本西）、渡邊 美央（真和）
 - デザイン 高瀬 由乃（九州学院）
- 池田 理来（文徳）、市原 輝子（ルーテル学院）、岩下 聖奈（文徳）、呉 安捺（熊本商業）
 大宮 愛美（真和）、高 君儀（熊本北）、蔵原 一恩（千原台）、島津 陽奈（九州学院）、下西 瑛里子（湧心館）
 田口 想太（熊本中央）、西村 莉胡（八代白百合）、農崎 湊斗（八代清流）、溝田 起子（真和）
 毛利 本仏（鹿本農業）、山田 ありす（八代白百合）、李 遠暢（尚綱）



構成団体／熊本ユネスコ協会、税理士法人近代経営、株式会社日本リモナイト、一般社団法人ドリーム・ラボ
 一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

共催・協力団体／独立行政法人国際協力機構（JICA）九州センター、日本ボランティア学習協会
後援／熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本日日新聞社



国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

（事務局）一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
 （TEL）096-359-2121 （MAIL）pj-info@kumamoto-if.or.jp
 （住所）熊本市中央区花畑町4番18号（熊本市国際交流会館）

